

建物の構造が音楽の様式に与えた影響 についての一考察

吉 永 誠 吾

A Study of the Influence of Architectural Structure on Style in Music

Seigo YOSHINAGA

(Received September 4, 1995)

はじめに

筆者はこれまでに、バイオリン独奏・室内楽・指揮など、数多くの演奏会を行ってきたが、どのような演奏会の場合でも、最も気掛かりなことは、ホールの音響がどんな具合かということであった。熊本という地方都市において演奏活動を行っていく場合、いつも立派なコンサートホールというわけにもいかず、小・中学校の体育館や、小さな町の公民館で演奏したこともあった。偶然に響きの豊かなホールで気持ち良く演奏出来たこともあれば、響きが悪く、砂を噛む思いをしたこともあった。

私達演奏家がこのようにコンサートホールの音響条件を気にするのは、ホールの音響条件が演奏の出来具合を大きく左右するからである。しかし、本論文で取り上げるテーマは、私達が普段演奏しているホールの音響がどうかという問題ではない。もう一步深く突っ込んで、私達が主に演奏している西洋音楽は、それがどのような場所で作曲され、演奏されてきたのか、日本というまったく異なった条件のもとで、どのような演奏活動をしたらよいか、また、子供達にそれをどう教えていけばよいかを考えることである。

I 建物の様式と音楽

1 建物は音楽の様式を決定づける

イギリスの音響学者ホープ・ベイジナルは次のように言っている。「すべてのオーディトリウムなるものは2つのグループのどちらかに入る。洞窟の音響効果をもつものと、野外の音響効果をもつものと。前者からは音楽が発生してやがてコンサートホールが育ち、後者は人間の音声にふさわしいもので、そこから劇場が生まれた。」

また、アメリカ物理学会の先駆者ウォレス・クレメント・セイビンは、シカゴで発表した論文の中で、部屋の音響効果が音楽の作曲と演奏に及ぼす影響の大きさを論じ、もろもろの民族の伝統、ひいては建造物の音響特性が、どのようなタイプの音楽を発展させるかに根本的な役割を果たすと述べている。ある地域の音楽が旋律を主とするか、それともリズムを主とするかは、その民族が歴史的に「屋内居住か野外生活か、住居が葦の小屋かテントか、木造か石造か、天井が高いか低いか、家具が重いか軽いか」によって決まるというのである。

子供のころ、洞窟やトンネルの中で声や音を発すると、その声や音が洞窟やトンネルの壁や天井にぶつかってはねかえり、その響き渡る残響を面白がった記憶を多くの人が持っているであろう。美しいハーモニーというものは、適度の残響によってより美しく感じられるものである。

2 日本の建築物と音楽

日本の家屋の特徴について、オーディオ評論家で音響建築を専門に、執筆や設計に活躍している岡山好直氏は、「高温多湿の環境の中で生まれ、定着した日本の伝統的住居は、通気性という特徴を持った。外人が『木と紙でできている』と捉えた日本の建物は、外人達の石や土（煉瓦）で造った家とは桁違いの通気性を持っている。」と述べている。またそのような日本の家屋は「音響的にスケスケである。」とも言っている。外人が『木と紙でできている』と知っているのは障子、ふすま、畳などのことを指しているのであろう。いずれにしても音を吸収してしまうものばかりで日本の家屋は造られており、残響など望むべくもない。ハーモニーを重ねて楽しむような音楽が発達する余地など全くないといってよいであろう。

3 ヨーロッパの建築物と音楽

筆者は既に、丸一年の滞在も含めて、三度ヨーロッパを訪ねた。その主な目的は弦楽器指導法の研究であったが、ヨーロッパを訪れる度に、いわゆる西洋音楽なるものが、ヨーロッパの町々の石作りの教会や、煉瓦造りの建物に似合うという感じを強くしている。本来、教会というものは、人々の神への真摯な祈りが行われるところである。ロマネスク、ゴシック、バロックなどのそれぞれの建築様式によって区別されるが、神への祈りの場所にふさわしく外観も内部も限りなく美しい。写真の最初のもはミュンヘンのテアティナー教会の祭壇およびパイプオルガンである。これまでに訪ねた中ではゴシック様式の教会として名高いドイツのウルムやケルンの大聖堂、イタリアのミラノの大聖堂が強く印象に残っている。特に天井の高いドームの中で鳴り響くパイプオルガンはキリスト教徒であるなしを問わず、思わず畏敬の念をいだかせる。小さな町や村にも、それにふさわしく小さな、しかし、とても美しい教会があり、かわいらしいパイプオルガンが置いてある。ドイツのバイエルン地方、スイスのアルプス、オーストリアのチロル地方にはそのような小さくて美しい教会が多い。次の写真はそのような小さな田舎町の教会の例として、名前はわからないが、ドイツ、バイエルン地方の教会の外観ならびにその祭壇である。西洋音楽の豊かな発展は、キリスト教の強い信仰に支えられていることは言うまでもないが、これら大都市の壮麗な教会や宮殿だけでなく、小さな町や村の教会と人々によって大切に守り育てられてきたということを強く実感させられる。

ヨーロッパは日本に比べると、全体的に寒冷的な気候である。特に冬は厳しい寒さが訪れ、零下20度ちかくなることもある。いきおい室内を暖かく保つために外気を遮断する工夫がいろいろとなされている。二重窓などがそのよい例である。ヨーロッパの家屋は日本のそれに比べ、通気性よりも保温性を大切にしている。つまり、音響的にいえば、より残響の多い所で過ごしているということになる。一言でいえば、西洋音楽はこれらの石や煉瓦の壁で囲まれた空間で生まれ育ったといえる。

4 キリスト教と建物と音楽

西洋音楽はキリスト教の今日ある発展のために、きわめて重要な役割を果たしている。このことは単にキリスト教あるいは聖書の題材にもとづく作品が、最高の芸術作品として数多く存在す

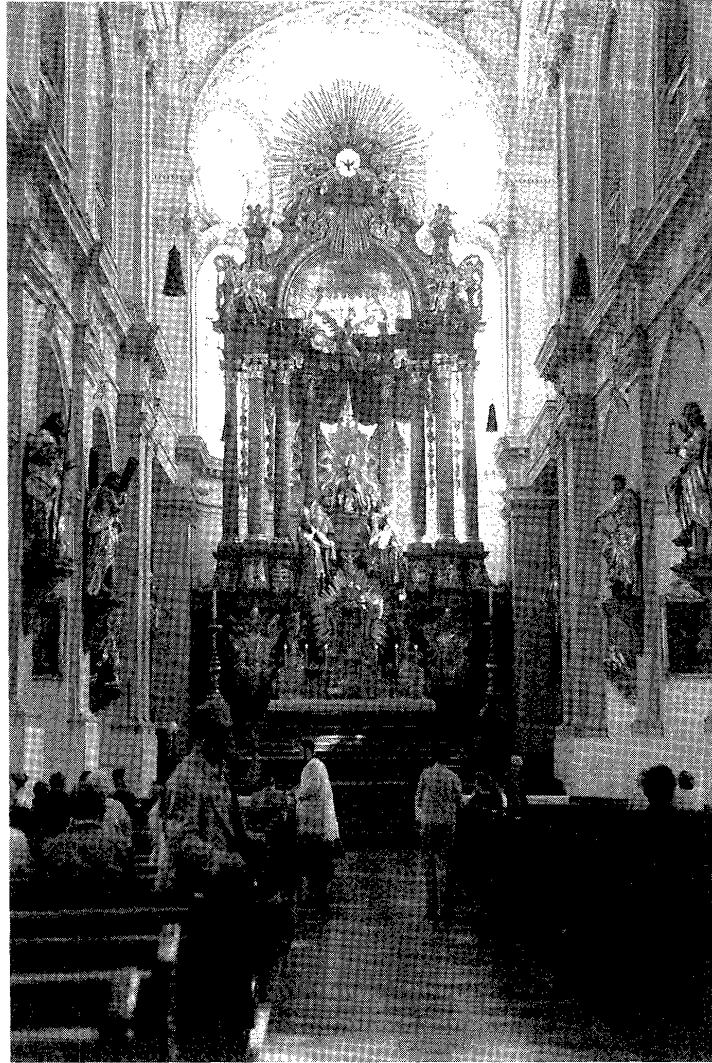


写真1 ミュンヘン聖テアティナー教会の祭壇

るにとどまらず、作曲家達が本当に神あるいはキリスト教を信じ、ひたすら神のため、あるいはキリスト教のために仕事をしていることから伺われる。たとえば、バッハを例にするならば、彼の計り知れないほどの才能は、もちろん彼自信の努力の賜物でもあろうが、その才能の最も多くを教会音楽の作曲ならびに演奏に費やしている。音楽家を単なる楽器であるとするバッハは、努力して最高の音楽を作曲し、演奏することは音楽家としての当然の責務なのであり、そうすることによって神に仕えることができると考えるのである。筆者はヨーロッパ滞在中に、日曜日の礼拝のために行われたオーケストラ、パイプオルガン、および合唱によるミサ曲の演奏を何度か聞く機会を得た。そのまさに壮麗ともいべき響きを言葉にする術を知らない。教会のドームの中に響き渡るハーモニーは、あたかも人々の神への祈りを天に伝えようとしているかのようである。

仏教においても、数多くのすぐれた絵画や彫刻が残されてはいるが、音楽の役割はキリスト教とは比べものにならない。世界三大宗教のうち、どれが良くてどれが悪いなどということは、だれにもいえないであろう。しかしすくなくとも、建物と宗教そして音楽の三つの力が一つになっ

た時、キリスト教はその宗教を最も広く、世界中に広める結果になったといえないであろうか。

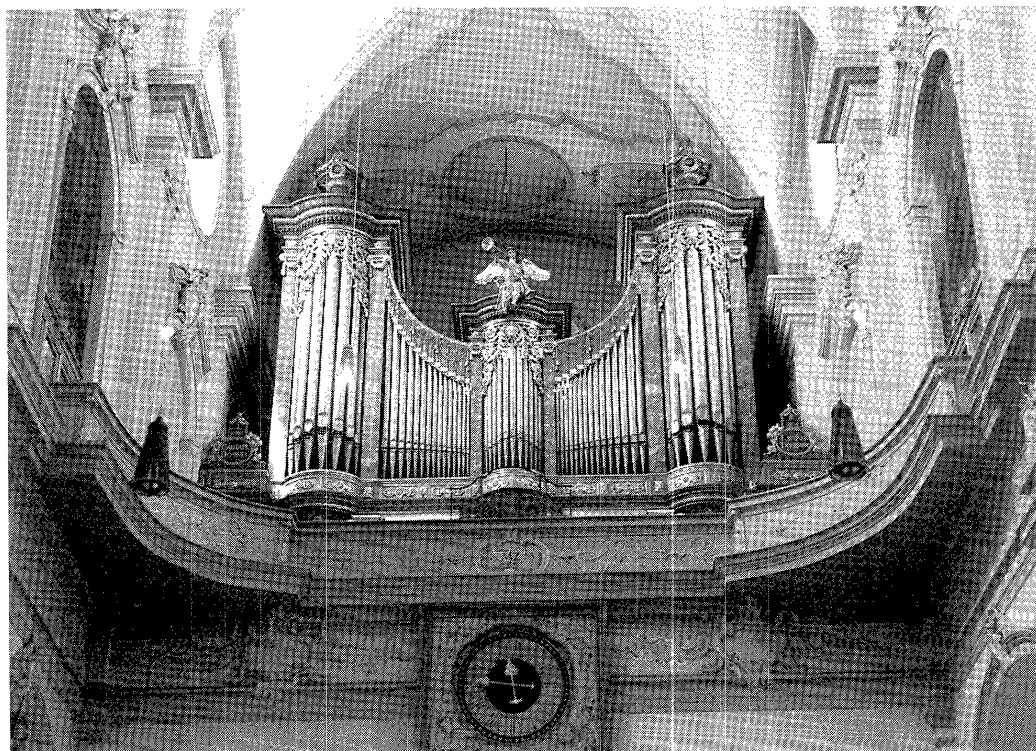


写真2 聖テアティナー教会のパイプオルガン

II 西洋音楽理解への道

1 西洋音楽が我国で十分に理解されない背景

西洋音楽の今日ある発達に対しては、キリスト教と建築様式がいかに深くかかわっているかということを見てきた。その西洋音楽が明治以降、我国に入ってきて以来、常に音楽教育の最も主要な部分に据えられながら、ごく一部分の子供達を除いては、決して歓迎されているわけではないという状態を、これまで常に見せつけられてきた。また社会においても、西洋音楽はいわゆるクラシックの音楽会の最も中心的レパートリーであったにもかかわらず、人々が自ら進んでチケットを買うどころか、半分義理で、あるいは半分押し売りの的に売買されるというような状況が永い間続いてきた。西洋音楽がそのような扱いを受ければ受けるほど、それはますます日本人の心から離れていってしまうに違いない。そしていわゆる、クラシック気狂いと称するごく一部の日本人のみが西洋音楽をこれまでのように、あるいはこれまで以上に自分の高尚な趣味としようとするであろう。

ヨーロッパの人々にとってはキリスト教は程度に差こそあれ、いわば心のよりどころである。筆者がミュンヘンに滞在した一年間、特に日曜日毎に教会に通ったわけではないが、決まった時間に聞こえて来る鐘の音は、大きな精神的安らぎを感じさせるものであった。ヨーロッパにおいてはおそらく、多くの人々がこの鐘の音を子守歌のように聞いて育ったにちがいない。また多く

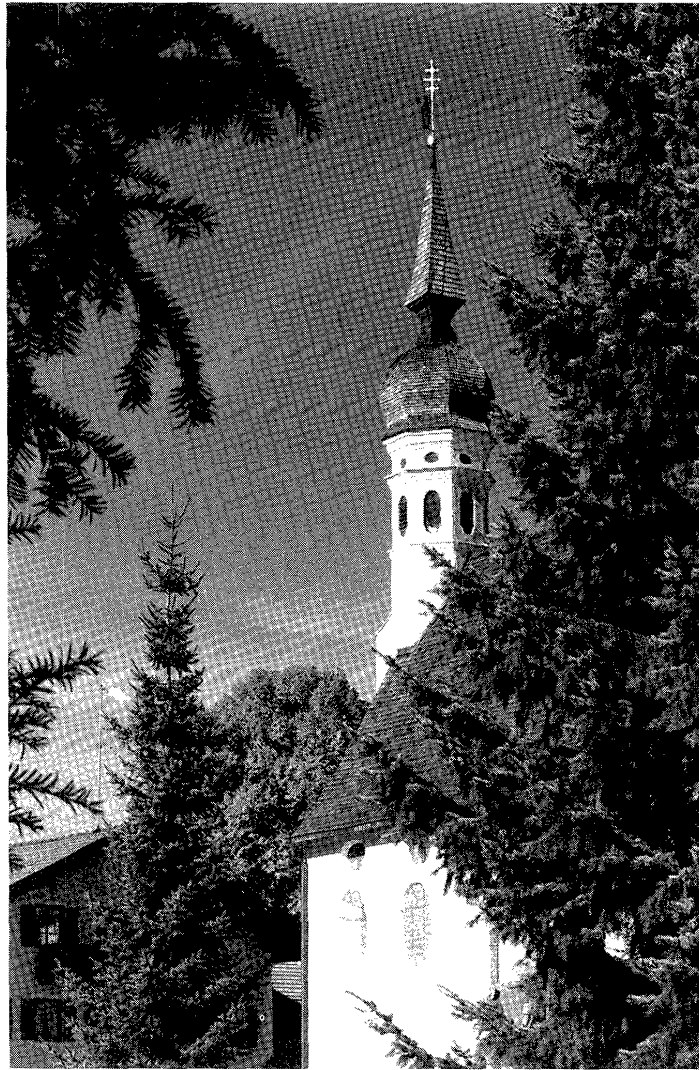


写真3 バイエルン地方の小さな教会

の人々が日曜日には教会に通い、パイプオルガンの音色に耳を傾け、ミサ曲の合唱に加わったのであろう。ヨーロッパの人々にとって、キリスト教と教会、それに加えて音楽は真に心のより所であり、心からの祈りとして存在したといえよう。

我国においては、もちろん仏教徒が最も多いであろうが、仏教がそれほど多くの人々の心のより所となっているとはいいがたい。まして、そこから発達した芸術音楽なるものも皆無に等しい。さらに加えて、通気性を重んじた木造の住宅に生活していれば、響き渡る音に驚き感動するといった経験も少ない。いわば、日本人の生活そのものの中に、いくつかの音が重なって作るハーモニーを楽しんだり、やまびことなって返って来る音をまねたような音楽が発達する素地がほとんどなかったといえよう。従って、いくら西洋音楽が芸術的に優れているからといって、何の下準備なしに日本人がそれをよく理解し、受け入れるとは考えられない。日本の多くの市民が西洋音楽をなにかしらよいものであると感じるためには、まず、幾つかの条件がきちんと整備されなければならないであろう。



写真4 バイエルン地方の小さな教会の内部の祭壇

2 学校教育における問題点

大人の場合には、もし西洋音楽が気にいらなければ食わず嫌いで済ますことも出来よう。しかし子供の場合には、事態はいっそう深刻である。必要な条件が充分整備されることなく、西洋音楽が授業の中で取り上げられているとすれば、大部分の子供達にその本当の良さが理解されないばかりか、ほんの一部分の音楽を好きになってくれそうな子供達からもそっぽをむかれることになりかねないのである。

理想的とはいえないまでも、よい音楽の授業ができるための必要な条件をいくつか考えてみると次のようなことがあげられる。

- ① 音楽教室の位置
- ② 教室の音響条件
- ③ AV 装置およびそのソフトあるいは楽器などの設備の問題
- ④ 教師自身の資質あるいは指導力の問題

筆者は仕事柄、本学の学生の教育実習において、これまで数多くの研究授業を見て来た。その

中のある中学校の音楽室はプールに最も近い建物の三階にあった。筆者がその学校を訪ねた時の授業内容はグリーグ作曲「ピアノ協奏曲イ短調」の鑑賞であったが、季節は夏であったこともあり、ちょうど真下のプールでは水泳の指導が行われていた。まさに水しぶき・ホイッスル・生徒たちの大喚声の中での音楽鑑賞であった。これはまさに①の問題なのであるがおかしいというより悲しくなる思いであった。②については前述の岡山好直氏の著書に学ぶことができる。岡山氏のいわんとするところを一言で要約するならば、音楽が演奏され、あるいは鑑賞される場所は十分に音楽的でなければならないが、同時にその音は外の授業の妨げにならないように工夫されねばならないということである。③については予算の制約もあるであろうが、筆者は特に映像ソフトについてはNHKの衛星放送を録画したものをよく利用している。そのほかには筆者自身が子供達に生演奏を聞かせる目的で「音楽鑑賞教室」を主催しているの、それについては別の機会にレポートにまとめたいと考えている。④についてもここでは取り上げず、別の機会にじっくりと取り組みたい。

いずれにしても、私達が教会に入っていくとき、決してふざけた気分や遊び半分な気持ちでは入っていかないはずである。もしそこに、一生懸命にお祈りをしている人がいれば、私達はその熱心なお祈りの妨げにならないように気を使うであろう。音楽室に子供達がふざけた気分や遊び半分な気持ちで入って来るとすれば、すでにその音楽の授業は失敗しているといえよう。音楽室とは低学年の子供達には何か楽しいことや夢がありそうな、高学年や中学生にとっては、感動との出会いがありそうな、そのような期待に胸がはずむような場所であればならない。

3 ビデオコンサートの試み

筆者はすでに、西洋音楽は石造りの教会や煉瓦造りの建物に似合うと述べたが、そのようなコンサートを行ってみたいと考えていた。幸いにも平成7年2月19日(日)に熊本市詫麻市民センターで親しみやすいクラシックのコンサートを開催して欲しいとの依頼があり、筆者の考えを実行に移す機会を得た。内容はヨーロッパの町や村をビデオの映像で見ながら、弦楽アンサンブルによる室内楽を鑑賞するというものである。これは一つにはNHKの「ドイツ音楽紀行」という番組がヒントになっているのであるが、映像資料としては、中世ドイツの姿を今日に残していることで有名なドイツロマンチック街道の町々を筆者が録画したものを編集して使用した。演奏曲目はバッハの「アリア」、モーツァルトの「アイネ クライネ ナハトムジーク」や「ディベルティメント」など、比較的ポピュラーなものを選んだ。そして最後はR・ロジャーズの「サウンド オブ ミュージック」メドレーで締めくくった。同じ内容のコンサートは平成7年7月18日(火)熊本市女性センターにて第五回熊本県車椅子陸上競技チャリティーコンサートとして再び開催した。聴衆の反応で特に印象に残ったことは、普段クラシック音楽を堅苦しいと感じている人々が、クラシック音楽に対して親しみを感じてくれたことで、筆者の意図した成果は得られたと考えている。クラシック音楽により多くの人々に親しみを持ってもらうために、今後このようなコンサートを各地で開催していきたいと考えている。

4 今後の課題

ビデオコンサートは一つの試みである。手前みそながら筆者が主宰する音楽鑑賞教室や、熊本大学フィルハーモニーオーケストラの巡回公演なども、クラシック音楽普及のための地道な活動の一つであり、それなりに成果を上げている。しかしヨーロッパの教会に匹敵するような施設、すなわち建物が必要である。当面はその建物は小・中学校の体育館である。これらの体育館は音

響的には決して良いとはいえない。しかし筆者の経験から、音楽会を開催しても差し支えない程度に良い音響の体育館も、数は少ないがある。すでにこれらの体育館は社会体育の活動のために広く市民に解放されており、さらに文化芸術活動にも広く活用されることが望まれる。筆者らの音楽鑑賞教室やオーケストラ巡回公演なども、そのような思想を背景としながら、活動が続けられている。従ってこれから新しく体育館が建設される場合には、音楽会を開催するのにふさわしい施設を計画して欲しいと考えている。

注

- 1) マイケル フォーサイス著「音楽のための建築」、長友宗重・別宮貞徳共訳、鹿島出版会、1990、p. 1. なお、この引用文の中のセイビンの論文は、Wallace Clement Sabine, *Collected Papers on Acoustics*, Harvard University Press, 1922, reprinted Dover, New York, 1964, p. 114 にある。
- 2) 岡山好直著「住まいと音」、音楽之友社、1983、p. 155～156
- 3) 前掲書、p. 19
- 4) アンナ マグダレーナ バッハ著「バッハの思いで」、山下肇訳、グヴェイット社、1975、p. 34
- 5) 岡山好直著「住まいと音」、音楽之友社、1983、p. 172～173